
OA&W

緑野 山葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

O A & a m p ; W

【Nコード】

N 0 6 3 8 Z

【作者名】

緑野 山葵

【あらすじ】

5年前に戦争を終えた平和な国セルドア王国で、ひよんなことから憎んでいた力を手に入れ、その使い道への葛藤が続く少年の前に、新たな敵が現れる。

序章（前書き）

初めて書くので温かい目でご覧ください。

序章

気づけば俺は、手足を縛り付けられ、ベットに横たえられていた。周りには何人かの白衣を着た研究員。そして、見覚えのある顔。

そうだ。思い出した。俺は自らを差し出してでもこの国を救う覚悟でここにいるのだ。

「気分はどうだ？」

俺のよく知るその男はさして心配していなさそうな抑揚のない声で聞いてくる。

「ああ、最高だよ。これで俺は英雄になれるんだからな。」

「では始める。」

「はい。」

研究員の一人が注射器に入った？それ”を俺の体へと注入した・・・

そう、僕の兄はこの国に殺されたのだ。

この墓石の前に立つのももう何度目だろうか。

そして、

いくつもの屍を乗りこえて成り立っているこの国で、大事な人の死を乗りこえられずにいる僕も、

例外なく今を平凡に生きている。

そう、この日までは。

第1話「偶然の必然」

5年前、この国セルドア王国は、隣国のクライス皇国との戦争を終えた。

クライス皇国が南下政策の重要拠点とするため、僕の住む国セルドアに宣戦布告してきたのだった。

圧倒的不利と思われたセルドアは、当時開発されたばかりの戦闘技術であるO A & a m p ; Wを使用する特殊部隊を導入。戦況は一変し、クライス皇国が一足遅れてO A & a m p ; Wを取り入れた頃には、その領土の三分の二を占領していた。

しかし、首都侵攻を目前にして、時のセルドア王が死亡。指揮系統はめちやくちやになり、やむなくセルドアは、占領した領土の半分以上を自国の領土とすることを条件にクライス皇国と休戦協定を締結した。

たかだか五年前かと思うかもしれないが、当時小学四年だった僕は、少し前まで戦争をしていたなんて実感は全くない。

いや、全くとは言えないか。むしろ、鮮明にただ一つのことだけを覚えている。

僕は今高校一年生だ。少し寄り道をしすぎてしまったか。辺りももう真っ暗だ。人っ子一人いない。

そんなに何時間も居ただろうか。携帯を家に忘れたから時間が分からない。急いで帰らなければ、と思い駆け出した。

そのとき。駆け出したと同時に 僕の歩く道路の右側の学習塾の二階の窓が突然割れた。

そこで僕は初めて、？それを見た。

まず目に入ったのは、黒い何かだった。

その後にもうひとり、リボルバー式拳銃を二丁構えた男が、その黒い塊を追って出てきた。

「待ちやがれ！」

地面に着地したその長身の男は僕には目もくれず、あるうことか街のど真ん中で銃をバンバン撃ちまくった。

まあ僕しかいないみたいだけど。

何発撃たれたか分からない黒い塊はみるみるスピードを上げて、街中発砲男とかなり距離を取り、逃げ切ったようだ。

その束の間、黒い塊に逃げ切られた拳銃男が行きと同じ速さで戻ってきた。やっぱり銃を撃ちまくりながら。

いや待てよ？撃ってきた？僕を狙って？

だが放たれた弾が撃ち抜いたの僕じゃなかった。撃ち抜かれたのはいつの間にか僕の後を取り囲んだ数人の武装した兵士だった。

「おいお前！こんなとこで何をしている！」

「何って、あなたこそ何をしてるんですか？ それにこの人たちは何なんですか？」

倒れている兵士達を指さしてこれまでの疑問を全て投げかける。

あれ？この人達は撃たれたはずなのに血が流れていない。それに死んでいるようにも見えない。

「何ってお前何も聞いてないのか？今は……」

言いかけたところでまた兵士達が現れた。

「とりあえず話は後だ。逃げるぞ！」

「は、はい！」

いつの間にか15人程の兵士に囲まれていた。

前方の兵士を撃ち、道を開けて学習塾の中へ入った。どうやら中までは追ってこないらしい。

塾と見せかけてどうやら軍の施設のようだ。

「あの、これは一体何が起こっているんですか？」

一息ついて、改めて訊く。

「あのなあ。さっきの放送聞いてなかったのか？」

「放送？」

「避難勧告だよ。ホントは機密事項なんだがなあ　まあここまで見られちゃったらはぐらかしてもしゃあねえか。」

「実はクライスのテロリストが潜入してるってんで俺ら軍人に排除命令が出てな、

今ここには俺しか戦える奴がないもんだからどうしようか考えてた矢先にここに乗り込まれた。そんで追っかけてったって訳さ」

「そうか、僕の見た光景はちょうどそのテロリストを追いかけたところだったのか。」

「でもなんであなたを狙って来たんですか？そいつらは」

「いんや、狙われたのは俺じゃあないな。お前は奴が逃げる時見なかったか？ちょうどお前くらいの歳の女の子を」

「女の子？」

「そういえば、逃げていく黒い物体がピンク色をした何かを抱えていたよな。」

「今思えばあの黒いのも抱えられていたのも人だったのだ。」

「奴らはその女の子が目的だったみたいでな、連れ去られちゃあしよすがないって訳で俺一人で出てったんだよ」

「なら、と僕は同じ質問をする。」

「その子を連れ去る理由は何です？あなたをおびき出す為の人質にでもするつもりで？」

「男は腰に巻きつけたバッグと銃に弾丸を補給しながら、いや、と首を振る。」

「間違いなくあの子、アス力を狙ったんだろうよ　あいつはちょっと特別だからな」

「特別？僕の頭の中である答えが導き出されたような気がした。」

「とにかく、俺はアス力を助けに行く。奴らのアジトの情報は軍部から入っているからな」

「じゃあ僕はどうすれば？」

「一緒に来い。どの道危険だが、ここに一人でいるよりはいくらかマシだ」

「わかりました」

「じゃあ 一気に雑魚を蹴散らす。死にたくなかったら絶対に離れるなよ！」

「はい！」

あ、そうだ。と男が思い出したように言う。

「俺はドレフユスだ。お前は？」

「カズマです」

そして僕達は学習塾を出て、女の子を助けに行くというなんだか漫画の主人公みたいな事をするために、

クライスのテロリストの本拠地へと向かった。

第2話「誘拐犯の正体」

正直、生半可な道のりではなかった。何度死の淵をさまよったことか。三途の川で溺れてなんとか這い上がってきたみたいな感覚だった。

兎にも角にもなんとか敵のアジトである街外れの工場に辿り着いた。アジトなのに敵が誰もいない。

おそらくここに来る途中に、僕の前を歩いているこのドレフュスさんがもう言葉通り雑魚をすべて蹴散らしたからだろう。

それにしてもすごい。この人の射撃の腕前は。

20人程のテロリストをひとりで、それも無傷で倒したのだから。だがやはり誰も殺していない。

急所をうまく外しているんだろうか？しかし撃たれて血が出ないなんてことがあるんだろうか。

「あの…！」

僕が言葉を発したのと同時にドレフュスさんが手で僕が話すのを制止した。

「静かに。気づかれるぞ！」

その言葉によって一気に緊張が走る。

学校の体育館の半分くらいであるこの工場の中央に、人影。

不気味な黒い何かを纏ったその男は確かにさっきあの学習塾を襲った奴だろう。

その傍らには女の子が一人横たわっている。この子がアスカだ。

突然、ドレフュスさんが両手に銃を構え、12発、つまりは一度に撃てる最大量を男に向かって放った。

だが、男をとりまく黒いものがそれを防ぎ、こぼれ落ちる薬莖の音が辺りに響き渡る。

第3話「2つの通り名」

撃たれた男はゆっくりと振り向く。

「やっぱりな」

ドレフユスさんが弾を込めながら、攻撃を防がれたにもかかわらず、不敵な笑みを浮かべ、確信めいた口調で言う。

「お前、「影使い」のセシルだろ。最初に見た時から思っただけが、ここに来てはつきりしたぜ」

「ははあ ばれちゃったかあ」

セシルと呼ばれたその男は、さして驚く様子もなく、頭を抱える。

「そんなに有名人なんですか？こいつ」

通り名があるくらいだから、よっぽど知られた奴なんだろうと思っ
て訊く。

「まあそうだな、こいつは先の戦争で当時クライス唯一のO A & W
部隊のエースだった男だ」

その言葉に僕は驚愕した。

「エースだなんてそんなあ。今は知っての通りテロリストとして絶
賛活躍中さ。それにあんただってあの戦争では国王直轄のO A & W
部隊10人の内の一人だろ？「無血の遊撃手」ドレフユス大尉さん

」

「ドレフユスさんがO A & W使い？本当なんですか??」

本人が反応するより早く、ドレフユスさんに尋ねる。

「ああ、お前も見たる？俺に撃たれた奴は傷ひとつ付いちゃいなか
ったのを」

やはりそうか。撃たれて無傷なのもこれで納得がいく。

「じゃあそのアスカって子も？」

すると、セシルがすかさず、

「知らないの？その子はねえ、弱点がないんだよ〜！」

と言う。

「弱点がない？」

セシルの言う言葉の意味が全く分からなかった。ありえない。

そう、そんな事がありえるのなら、あんなことにはならなかったのだから。

O A & W。それは、ひとつの能力を得る代わりにひとつの弱点を得る力。

弱点は能力によって違う。

それは時に弱点でありリスクであり障害である。

能力も弱点も力を得ないと分からない。故に選ばれた人間にのみ力の譲渡が認められている。

だから弱点がないはずはない・・・

僕はまだ戸惑っていたが、やがてドレフュスさんがセシルに銃を突きつける。

「やっぱり知ってやがったな。ならやはり生かしちゃおけねえ。

おいカズマ！そこはあぶねえ！どいてろ！」

この2人がO A & W使用である事実と、そのO A & Wの定義を根底から覆す少女の存在に、

僕はそんな言葉も耳に入らずただただ呆然としていた。

「ここで死ぬわけにはいかないんだよね〜 この子は僕にとっても必要だからね〜」

そう言うと、セシルは自らの影を鎌の形に変形させ、ドレフュスさ

んへそれを振り下ろす。

ドレフユスさんも応戦するが、やはり弾が影に防がれる。

セシルは今度は無数の紐状に影を変化させ、攻撃する。

これはドレフユスさんが全て撃ち落とす。

そんな攻防を繰り返して、しばらくするとドレフユスさんが僕に言ってきた。

「おい！ぼさつとしてんじゃねえ！何かこの力に思い入れがあるみたいだが、頼みがある！」

「頼み？」

ようやく僕は顔を上げる。

戦いながら、ドレフユスさんはこう続けた。

「そうだ。お前に、OA&W使いになってもらいたい！」

第5話「死の真相」

O A & a m p ; W 使いに？ 僕が？

そんなの 答えは決まっている。

「いや です」

「力を得るのは怖いかもしれないが、今は緊急なんだ！頼む！」

「無理ですよ。」

「何をそんなに拒んでいるんだ？ 誰も軍人になれとは言っていない。事が終われば明日からは普通に暮らすことも…」

「殺されたんですよ。兄はその力に殺されたんですよ！」

自分でも信じられないくらいに大声で叫んでいた。

「殺された？ 僕たちの部隊にやられたってことかな？」

剣の形の影でドレフュスさんに斬りつけながらセシルが口を開く。

「違う。兄さんは、実験台になって死んだんだ。O A & a m p ; W の最初の能力者として、死という弱点を背負って。」

そこで驚いた様子でドレフュスさんが言う。

「最初の使い手？ まさか君の兄さんはワビスケさんか？」

「兄を知っているのですか？」

「知ってるも何も、戦争時の俺の所属していた部隊の隊長だった人だ。」

あの人は自らを差し出し、国のために死んでいった。確かに辛いかもしれないが、ワビスケさんが守りたかったこの国が、アス力を奪われることでまた危機に陥るかもしれない！ 君にも O A & a m p ; W 使いになってもらうしかないんだ！」

僕はただ首を横に振った。

助けたい、だけどこの力は…

「迷っているなら一遍死ね。ワビスケさんの弟ならなおさらやってくれると思っただがな！」

そう言うとドレフュスさんは、セシルと距離を取り、銃口を2つと

もこちらに向け、2発発砲した。

そう、今度ははつきりと僕を狙って。

胸のど真ん中に命中したとのほぼ同時に、僕は意識を失った。

第6話「少女との邂逅」

しばらく経って、僕は目を覚ました。

撃たれたはずなのに、やはり当然というか、血が流れるどころか無傷だった。

「ハア：ハア：だから俺は無血の遊撃手だって言ってるんだろ？」
気が付けば隣に横たわっていたドレフユスさんが、僕の心中を察したように言う。

あれ？撃たれた僕とは対照的に、僕を撃つたいわば犯人であるこの人は、血だらけだった。

無理もないだろう。

あんな奴と戦っているのだから。

そうだった。

やっとこの状況を思い出した。

「ドレフユスさん！セシルは倒せたんですか？そしてそのケガ大

丈夫ですか？」

「大丈夫。とはとても言えないが、これくらい何度も経験済みだ。

それとセシルは俺らを必死に捜しているさ。アスカも取り返したことだしな。」

そう言い、僕の方をちらりと見る。

そういえば、何か膝に乗っている。

最初は上にドレフユスさんが脱いだ上着が乗っているだけだと思っていたが、やけに重たい。

そっと上着をどけてみると、目の前にピンクの髪の少女。

すると彼女はちょうど目を覚ました。

そして僕の膝の上で意識を失っていた事に気付いて、悲鳴を上げる。

「んぐっ！」

上げようとしたところで慌ててドレフユスさんが口を塞いだ。

「馬鹿野郎！奴に気づかれるだろうが！」

口を塞いでいた手を離すと、彼女はすかさず言う。

「隊長！なんですかこいつ！変態？」

そう言つて、僕の膝から離れる。

「すまんすまん。面白くなるかと思つてな。それよりお前、誘拐されたんだぞ？まあまだ半分誘拐されたままみたいなもんだがな」

そうだ、セシルをなんとかしなくてはまた彼女が連れていかれるかもしれない。

「確かに誰かに襲われた感覚はあります。それに隊長がそこまでやられてるんだから相手は相当ですね。」

「ああ。そこでこいつが必要つてわけさ。」

ドレフユスさんが僕を指差す。

「この変態、使い手なんですか？とても軍人には見えないんですが」

「さつきから失礼じゃないか？人の事変態呼ばわりして！」

さすがに反論した。僕が可愛い女の子に変態と言われて興奮するよ
うな奴だと思われては困る。

「じゃあ何者よ？」

「何者つてただの……」

「ただの高校生かと思つたらあの『英雄』ワビスケさんの弟だった
んだよね」

ドレフユスさんはまたもや銃口を僕の方に向ける。

「この中にはOA&mp;Wの強制発動弾が入ってる。本来はテ
ストに合格した者しか使い手にはなれねえが、俺ら隊長達には力の
付与が緊急時のみ認められている。もう一度聞く。使い手になる気
はないか？」

そのとき、隠れるためのバリケードにしていた工場の廃材を切り裂
いてセシルが現れた。

「みーつけた！」

第7話「覚醒」

「ちい！来やがったか！」

ドレフユスさんは僕に向けていないもう一方の銃で、セシルに発砲した。

すると、辺りに煙が立ち込め始めた。

どうやら煙幕弾を撃つたらしい。

「今の内に逃げるぞ！」

言われるがまま、僕は2人の後を追った。

しかし、外に出るやいなや、眼前にセシルが回りこんでいた。

「隊長！弾貸してもらえます？」

「ああ、10発しか残ってないが使え！」

彼女は弾丸を受け取ると、突然それを宙に浮かせた。

そして生き物でも扱つかのように手で操作し、セシルに向けて飛ばす。

だがセシルは影も使わずひよいと避ける。

「こんなの飛ばしても当たらないし痛くないんじゃないの？ぐあ
！」

余裕の表情で挑発していたセシルを突然スピードを上げた弾丸が貫く。

「油断したわね。私の能力は重力を自在に操れること。物を浮かせたりそれを動かしたり。今のは地球の5倍の重力をかけたから、普通に銃を撃つより速いのよ。避けられる方がおかしいわ。」

だがセシルは余裕の笑みを崩さない。

すると彼女の背後に、影。

その首を手の形をなした影が締め付ける。

「ぐあああ……」

うめく彼女にセシルは近付き、影をバットのような形に変形させる。「抵抗されるならしかたないな」。手足を折ってでも連れてくよ」

セシルがお手製のバットを振り上げたそのとき、その影が吹き飛ぶ。ドレフユスさんが放った最後の一発が当たったのだ。

その隙に僕はセシルの懐に入り、顔を思いつきり殴った。殴られた本人は2mほど吹っ飛んだ。

「あんだ、その髪…」

僕の赤くなった髪を見て、彼女も状況を理解したらしかった。

「遅くなってごめん。やっと覚悟が決まったんだ」

こうして僕は兄さんを殺した力を得てしまった。

そう、得てしまったのだった。

第8話「覚悟」

こうして僕はO A & a m p ; Wの使い手となった訳だが、この国、この力を許した訳ではなかった。

「ドレフユスさん、僕を撃ってください。」

徐々に追いつめられていく彼女を見つめ、僕は言った。

「いいのか？ああ言ったもののこの力は得る能力は大きいけど、どんな弱点がついてくるか分かったものじゃない。俺は知っての通り、早撃ちとかなりの命中力と引き換えに銃では傷をつけられない。君の兄さんのように死なないとも限らないぞ？」

覚悟はできた訳ではない。ただ、

「目の前で苦しんでいる人を見殺しにするくらいなら、この国が兄にしたこととなら変わらない。兄ならこんなとき何を犠牲にしても助けるでしょう。」

O A & a m p ; Wを得るべきか、悩むのは今じゃない。「そういう意味では覚悟が決まったのかもしれない。」

ふっ、とドレフユスさんは軽く口元を歪ませて、銃を向けた。

「俺が援護できるのはあと一発だ。そしてこの状況をどうにかできるのはもうお前だけだ。いくぞ！」

そう言うとすぐに僕に向けて引き金を引いた。

そして、再び彼の弾丸が僕の体を貫いた。

第9話「判明する能力」

「カズマ！そいつの弱点は光だ！ただ攻撃してるだけじゃあ奴の纏っている影に守られてたいしたダメージも与えられない！」「光？そんなに都合よく光なんか……」

いや、わかりました。ドレフュスさんは隠れててください。ほら、君も。」

2人を安全な場所へ行かせなければ。

しかし、

「何言ってるのよ。力を得たばかりのアンタにだけ任せてられないっての。私も戦う。」

「でも…さっきやられそうになってたじゃないか。本当に大丈夫？すると彼女は少しムツとした表情になって反論する。」

「あのねえ、まだ自分の能力と弱点を把握してないアンタのために仕方なく協力してあげるって言ってるの！素直に助けられなさいよ！」

「分かったよ。」

しかし、彼女の言う通りだ。

自分の能力が判然としない今、迂闊に突っ込んでも返り討ちにあうだけだ。

「作戦会議は終わったかな？」

ドレフュスさんの言ったように、僕に殴られたくらいでは影に守られてダメージを与えられないらしく、相変わらず不気味な笑みを浮かべ、セシルが立ち上がった。

「じゃあ、さっさと終わらせようか」

言うより早く、鎌状にした影を作り出し、僕達の方へ向かって来た。言葉とは裏腹に、作戦会議をさせてくれる気など毛頭ないらしい。まあ待つてくれる訳はないだろう。

先程のパンチのお返しとでもいうように、真っ先に僕へ鎌を振るう。

それをひらりと避け、もう一度拳を叩き込んだ。少なくともそのつもりだった。

だが、鎌の刃の側面部分であっさりと受けられ、逆に蹴りを決め込まれそうになったが、なんとかかわした。

僕はこの時点ですでに違和感を感じずにはいられなかった。

明らかにセシルを殴り飛ばした時と今防がれたのでは、威力が違っている、と。

「あれ〜？おかしいな〜。手加減したつもりはなかったんだけどな」

本当に不思議だ、と言って首を傾げる。

「僕が奴を引きつける。その隙になんとかしてくれる？」

僕は彼女に向き直って言う。

「残念だけどそれしかないみたいね。」

確信はないが、今はこれが最善だろう。

「まあいいか〜これで終わらせるから」今度は二つの短剣となった影を自在に操りながら、セシルが近距離で攻めてきた。

かなりの猛攻だったが、なんとか全て見切った。

怒涛の連撃の合間の僅かな隙を狙って、片方の剣にパンチを決める。するとさっきはびくともしなかった影がバキツと鈍い音を立てて碎けた。

今度はもう片方を攻撃したが、こちらは碎けることはなかった。

だがこれで憶測が確信に変わった。

「その異常なまでの回避能力、そして回避の後の攻撃力の高さ。どうやらそれが君の能力のようだね。」

急に神妙な顔つきになったセシルが分析する通りだった。

「となると弱点も自ずとわかったよ」

そう、あらゆる攻撃を回避する能力、正確には攻撃を見切ってかわす目を得るが、自分が攻撃する事は出来なくなるという弱点があるようだ。

そしてある一定量の攻撃を回避すると、一撃分だけ強力な攻撃を放

つ事ができるようだ。

しかしやはり、影を破壊するだけで、セシルの体自体には攻撃が当たらない。

と、なるとやはり光か。

「どうすんのよ！そのあんたの攻撃でも駄目みたいけど？」

見かねた彼女が聞いてくる。

「もう一度さっきの感じでいこう。考えがある。」

幸か不幸か僕の上着の右ポケットには、いつも兄さんの墓で使う、懐中電灯が入っていた。

第10話「反撃の糸口」

まずは試す必要がある。

そう思った僕は、セシルと距離を詰め、懐中電灯の光をちょうど胸の辺りに浴びせた。

すると、うっ！という呻き声とともに、光が当たっている部分だけが、形容するまでもなく肌色の肌、つまりは人間のそれへと変わった。

だが、やられるがままな訳がない。

セシルは光の焦点から体を外し、そのまま横に転がり込んだ。

体に光が当たらなくなるのと同時に、露出していた部分か元の影に戻った。

「まさかそんなものを持っているなんて予想外だよ でも！」

そう言つて、態勢を立て直しつつナタ状にした影で懐中電灯を狙つて斬りかかってきた。

リーチが長かつた上に的確な攻撃だった。

僕の能力がこのようなものでなければ、もう奴に勝つ方策は尽きていたことだろう。

つまりはかわしたのだ。

「光があつても攻撃が同時に当たらないと僕に傷ひとつつけられないよ！昼間ならまだしも、深夜の今それで勝つつもりなら、遠距離から攻撃でもしないと当たらないんじゃないかな？」

確かに、これでは埒があかない。

でも何だろう、今のセシルの言葉がどこか引つかかる。

同時に当たらないと？

そうか！

それならば策はある。

僕はおもむろに懐中電灯のスイッチを切った。

第11話「決着」

スイッチを切ったといっても、電池が切れそうだとかいうわけではない。

「ねえ？どうするのよ！あたしは何をすれば？」

僕の行動が読めないというように、半ばキレ気味で彼女が再び聞いてくる。

「時間を稼げる？20秒でいい」

「できるに決まってるでしょ！なんだか分からないけどやってやるわ！」

そう言い終わると、彼女は再び弾丸を浮かせ猛スピードでセシルへ飛ばす。

避けきれないと判断したセシルは、とっさに影で盾を作り防御する。僕はその隙に、自分の上着で右腕に懐中電灯を巻きつけた。

セシルは盾のうしろで鎌を作り、今まさに彼女に切りかかっていた。もう間に合わない！

そう思ったが、突然。

僕の足が軽くなった。

そしてここで懐中電灯のスイッチをつける。

間一髪、2人の間に入った僕は振り下ろされる鎌を避け、再び、今度は腹のど真ん中を殴る。最初のように影を殴ったのではなく、光で影を消し、それと同時に攻撃することで、セシルの生身を叩くことができたのだ。

「くっ！自分の言った言葉があだになるとはね…」そう言って、セシルは倒れた。

死んではいないだろうが、幾分パワーが底上げされた僕のパンチを生身で受けて、さすがにしばらくは動けないだろう

「やるじゃない あんた。まあ私の助けがあつての勝利だけど。」

「じゃあさっきのは…」

「私の能力であんたの両足を半無重力状態にしたの。だから足と地面が接する負担が軽くなって、スピードが上がったってわけ。感謝しなさい。」

そういえば、と僕は切り出す。

「まだ自己紹介がまだだったよね。僕はカズマ」

「アスカよ。呼び捨てでいいわ。」

「うん、アスカ。よろ……し……く。」

「ちょっと！どうしたの？」

そして僕の記憶は、ここで途切れる。

第12話「入隊」

気がつけばもう朝だった。

そこは少し見慣れた景色。

ここは学習塾か？

ふと視界に、3つの人影。

「目が覚めた？」

桃色の髪の少女、アスカが話しかけてくる。となりには頭と体に包帯を巻きつけた、ドレフユスさんが立っていた。

どうしてここにいるのだろうか。

「あれからどうなったんですか？」

やっと昨夜の出来事を思い出し、真っ先に思いついたことを尋ねる。

「力を手にしたばかりなのに加減を知らなすぎたな、カズマ。セシルは倒したが体力を使い果たしたお前もすぐに倒れたんだ。ケガ人の俺とアスカだけでここに連れてくるのは骨が折れたぜ。」

昨日の戦闘でかなり傷ついたドレフユスさんと、アスカの2人だけで連れてくるのは大変だったことだろう。

「手間をかけました。それでセシルは？」
「俺らは退却するのに手一杯で詳しくは知らないが、後から現場に駆けつけた一般兵の報告だと、姿はすでになかったらしい。つまりは逃げたってことだな。」
「そうか、良かった。僕は人殺しをしたわけではないようだ。」

「カズマ。お前これからどうするんだ？」
「これから。僕がここに留まるか否か。」

「僕を仲間にしてくれますか？ドレフユスさん。」

「いいのか？ここは軍だ。いつまた戦争になって死ぬかもしれない。」

「兄さんのように死ぬかもしれない。」

でも、

「だからこそです。これ以上この力で人が死ぬのは見たくない。内

側からこの国を変えたいんです。」

ふっ、とドレフユスさんの口元が歪んだように見えた。

「そうか。歓迎するよカズマ。改めてよろしく頼む。俺はセルドア王国第9 O A & a m p ; W部隊隊長のドレフユス大尉だ。」

そして隣のこいつは、「副隊長のゾラ。階級は中尉だ。」

目覚めてからずっとそこへ立っていたその人は、ドレフユスさんより少し背が高く、着物のようなものを羽織り、腰には刀を差していた。

「この隊はお前とアスカを入れて10人いる。他の6人は各々他の任務でいないが、戻ったら紹介してやる。もうひとつ、セルドアではO A & a m p ; W使いは互いの弱点をカバーするために必ず戦闘時に二人一組で行動する。で、昨夜の戦いぶりを見るからにお前とアスカは息ひったりだ。今日からお前らはパートナーってことで頼むぜ。」

「わかりました。」

「足引つ張るんじゃないわよ!」

言葉とは裏腹に、少し嬉しそうな表情を浮かべるアスカ。

こうして僕はセルドア軍の一員となった。この先に何が待っているかも知らずに。

第12話「入隊」(後書き)

ここまで読んで下さってありがとうございます。

1章はこれで終わりです。

これからもっと面白くなるように展開を練っております。
どうかこれからも読んでやってください。

番外編「遊撃手の追想」(前書き)

番外編にして最長になりましたw

番外編「遊撃手の追想」

ここで少しだけ道を逸れよう。

昔の話をしよう。

だがここで語るのはいわば独り言のようなものだ。

あの少年に思い出せられた過去。

その少年が知らないあの人の真実。

だから俺が、今では一部隊の隊長であるドレフユスが独り言を長々と呟くこととしよう。

俺があの人に出会ったのはクライスとの戦争中だった。

当時の戦況はセルドアにとって最悪なものだった。

みな死を覚悟していた。

そんな中俺は元よりずば抜けていた射撃の腕を買われ、ある小隊に配属された。

今もパートナーとして組んでいるゾラとはここで出会った。

彼は彼で、その並々ならぬ剣の腕前を評価されたことだった。

そしてそんな俺達の隊長になったのが、ワビスケ大佐だった。

当時大佐といえは、軍部では2人しかおらず、ほとんどセルドアの最高戦力といっても過言ではなかった。

あえてそんな階級の彼を小隊の隊長などという役職に留めたのかというと、ひとえに彼が強すぎたからだ。

いたずらに大人数で編成された部隊を彼に任せても、かえって邪魔なだけだった。

そんな人の下についた俺は、ある問題を抱えていた。

それゆえにある失態を犯してしまう。

小隊に配属されてから3日程過ぎたころ、俺達に最初の任務が下っ

た。

そして当然いきなり戦争の最前線に投入された。

ワビスケさんとゾラが果敢に戦場を駆ける中、俺は一人立ち尽くしていた。

何をしているのかと問われても、何もできなかった。

なぜなら俺はその日まで、一度も人を殺したことも、的以外には引き金を引いたことすらなかったのだ。

恰好の餌食だとも言わんばかりに俺に群がる敵兵達。

気付いた時にはもう遅かった。

深々と斬りつけられるのを黙って見ているしかなかった。

敵兵の前に立ちふさがったワビスケさんが斬られる様を。

その後の事は何も覚えていない。

あとから、事態を唯一人見ていたゾラから聞いた話では、30人近くいたクライス軍の兵士達を俺一人で退却まで追い込んだらしい。

ワビスケさんがやられたことに対する怒りか、己の無力さに対する怒りか、自分でも分からないが、あれだけ人を撃つことに躊躇していた俺があの中で初めて引き金を引いたのは確かだった。

どうせならあと少し早く撃つていれば彼は傷つかずに済んだのにと、自責の念にとらわれずにはいられなかった。

だが、ベットのの上に横たわるワビスケさんは、

「よくやった。」と、そう言った。

それは俺が無意識にもあの場で勝利したことに対する激励だと思っただ。だが、

「あんな命のやり取りの中で恐怖が何より先立って現れる。それはなかなかできるもんじゃない。常人なら恐怖することにすら恐怖する。そして生き残ることに必死になって、やられるのがオチだ。ようは引き際が大事ってことさ。」

「でも、でも俺は大佐に怪我をさせてしまいました！」

人を傷つけてまで恐怖しているくらいなら俺はあそこで死んでいた方がよっぽどいい。そう思った。

「けどお前は俺を助けてくれたじゃないか。あのまま戦ってれば数で不利の俺達が勝てる見込みは少なかった。むしろこのくらいで済んだ事に感謝しなくてはいけない。ありがとう、ドレフュス。」
やめてくれ。礼を言われる資格なんてない。

そんな俺の気持ちに気づいたワビスケさんはこんな話をした。

「なあ、お前はなんで軍に入ったんだ？しかもこんな時に。」

「こんな時だからこそ、です。」

どの国が悪いとかじゃなく、戦争をしていることがいけない。誰も死んではいけない。」

だから誰も殺せなかった。

殺せば矛盾を孕む。

憎しみの連鎖に巻き込まれ、戦争の渦から逃れられなくなると。

「この国の為でなく、全ての人が笑って暮らせるように、力になりたかったんです。」

するとワビスケさんは少し驚いたような顔をしたが、すぐに微笑んだ。

「すげーな。お前は大物になるぞ！俺なんて大それた理由なんてない。たった2人の弟を泣かせるような自分を変えたい。

家族ぐらいは守ってやりたかったんだ。この国で笑って生きられるようにしてやりたいって思ったからここにいる。」

その点ではお前と似てるのかもな、とワビスケさんはどこか遠くを見据えて話しているようにも見えた。

突然、

トントン、とワビスケさんの病室の扉を叩く音がした。

中に入ってきたのは当時の俺には知らなかった男。

しかし着ている軍服の両肩に輝くおびただしい勲章の数を見る限り、軍の上層部の人間であることはわかった。

「やあワビスケ大佐。怪我の具合は思ったよりよさそうだね。」

ワビスケさんの知り合いか？

「君に相談していた例の件だが、手筈が整った。早速どうだろうか？」

「ああ、早いに越したことはないからな。すぐに始めてくれ。」

この時は何を言っているのか分からなかった。だが、ここで止めていらねえと今では思わずにはいらねえ。その謎の男と共にワビスケさんは部屋を出た。

そして2時間後、俺とゾラに緊急召集がかかった。

緊急ということだ。ただでさえ緊張感が走るなか、告げられた任務の内容に俺達は言葉を失う。

それは、ワビスケ大佐を殺せ、というものだった。

連れていかれたのは病院の中の第三研究室という部屋だった。

部屋の奥からはものすごい物音がした。

入れ、と言ったのは、さつき病室に入ってきたあの男だった。

「何があつたんですか！大佐を殺せなんて。そんなことできるわけありません。」

しかし男は、

「入ればわかる。」

とだけ言つて部屋の扉を開く。

研究室は二階と一階を一部屋として使用しており、俺達は二階部分の入り口から中へ入った。

そして室内の光景に衝撃を受ける。

一階にいた物音の正体は紛れもなくさつきまで俺と話していた、ワビスケさんその人だった。

しかも彼の周りには血を流して倒れている研究員であろう白衣を着た数人の死体。

真っ赤に染まった自分達の上司。

「大佐！何をしているんですこんなところで！」

そう叫ぶ他無かった。

だが答えは返つてこない。

聞こえていなかった。俺の声など。

彼は一階部分の扉を壊そうとしていた。仮にも研究室だ。

少なからず頑丈だろうが壊されるのも時間の問題のように見えた。

「ドレフユス！このままだと他にも被害が出る！何が何だか分からんが、とりあえず大佐を止めるぞ！」

ゾラはこんなときでも冷静だった。言い終えるより速く、一階へと飛び降りていった。

大佐を止める？殺さずに止めることなんて出来るんだろうか。

それ以前に俺にはあの人を撃てるわけない。

むしろ彼に殺されても文句は言えない。

あれこれ思考している間に決断の時は近づいていた。

ワビスケさんに斬りかかったゾラは、一発。

ワビスケさんが繰り出した拳をまともにくらって引き寄せられるかのように壁まで吹っ飛んだ。

体を激しく打ち付けられ、意識を失ったゾラに、ゆっくりと歩み寄り、なおも追撃の手を緩めない変わり果てた彼を、ただ見ているだけしかできなかった。

すると後ろで見ていたあの男が俺の肩に触れながら言い出した。

「いいのか？このままだと君の仲間には彼に殺される。それだけじゃない。ここで食い止めなければ被害は拡大するだろう。」

「そんな．．．大佐を撃つなんてできない。大体あんたが何か絡んでいるんだろ？なんとかしるよ！」

「ああなってしまうってはもう取り返しがつかない。それに俺はまだ戦えない。」

何を言っているのか分からなかった。

分かったことは、こいつのせいで大佐はこうなり、そして自分では何もする気がないということだ。

俺は銃を構えた。この時はまだ一丁しかなかった銃を。

俺がやるしかない。

しかしやっぱり引き金を引く勇氣なんて俺には無かった。

「君の活躍は聞いている。ここで反逆者を討ち取れば、一気に英雄だ。さあ、撃て！」

首を絞められ、今にも窒息するか首の骨を折られるか、というところで、もう俺に考える余裕なんてなかった。

「うわあああああ！」

今度は自らの意思で、ワビスケさんを撃った。すぐに後悔した。

手や足を撃てばよかったものを、胸のど真ん中を撃ち抜いていた。

いつもの真ん中だけを正確に撃ち抜いている癖が、こんなところで発揮されてしまった。

その場に崩れ落ちた俺は、

「大佐が裏切者ってことにはしないでくれ。俺じゃなく敵に殺されたことにしてくれ！」

男に頼んだ。

「分かった。お前がそれでいいなら彼は名誉の戦死を遂げたことにしておこう。」

但し、とこう続けた。

「君達にはやはり英雄になってもらおう。」と。

それからワビスケさんをおかしくした力はO A & Wという力だと知る。

その事実を知ってしまった俺とゾラはこの力の実験台になり、実験成功の第一例目となった。

これを皮切りに、セルドアは一気に優勢に立ち、俺やゾラは目覚ましい戦果を挙げて講和に持ち込んだ。

この国は確かにワビスケさんの犠牲の下に救われた。

だが俺はあの男だけは許せない。

きっとこれを知ればあの少年も。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0638z/>

OA&W

2012年1月2日11時52分発行